カミバロー
平成19年5月5日
第１７７号
清野新聞社

今年の五月連休は実家の母家を解体するために上芭露に帰省しました。今回は私だけだったので大洗からフェリーで苫小牧に上陸し、行き帰りも兄の車に同行させてもらい共同で作業してきました。

一、母屋の解体作業

昨年の夏に父が脚立から転落して負傷し、頭の手術をすることとなった要因が古い母屋でもあったことから早めに解体することにしました。兄と相談してGWを利用して中三日もあれば何とかなるだろうということで四月三〇日から五月二日の日程を設定しました。

前回馬小屋解体の経験があるとはいえ、二階建ての母屋は規模も違い大作業です。

初日は早朝七時前から作業開始。三角張り、カスガイ等を外し、玄関等の出っ張りをチェンソー等で分離して前作業を行っているところへKさん、Tさんの二台の大型トラクターが到着。一階の柱を数本チェーンで引き抜いて間引きした後に、二台のトラクターで北側に一気に引き倒すことにしました。ワイヤーが切れたりと途中いろいろありましたが、轟音に砂埃とともに、すごい迫力で倒れました。

二階の部分が一部そのままに残ったので、再度ワイヤーをかけて二次解体作業を行って何とか第一段階の引き倒し作業は終了しました。思ったより順調にいったので、ここでいったん一休みしようと時計を見るとまだ午前一〇時前でした。一日が実に長いと実感！

解体前後

その後、翌日一杯かけて屋根板や主要な柱の類を解体整理しました。残った大量の土壁は重量物で手を付けにくいので、しばらく雨風に任せたほうが無難と判断し次回の作業で片づけることにしました。

玄関の解体作業で壁の間から沢山の蛇の脱皮が出てきました。我が家の長年の平穏は、幸運の神の使い手といわれる彼らのお陰かも知れませんね。

我々が育った母屋がなくなるのは一抹の淋しさもありますが、完全に倒れて見通しが良くなった景色をみるとそこに家があったこと自体が何か信じられない気がしてきます。

何はともあれ当初の目標どおり解体作業は終了しましたが、やはり危険な重労働でした。全身筋肉痛に握力なし、打撲内出血二ヶ所、切り傷三ヶ所、釘の長靴踏み抜き穴二ヶ所という状況でしたが、全てたいしたことない軽傷で大きな事故もなく幸いでした。

二、ビニールハウス改築

今のビニールハウスは数年前に近所から規格の違う複数を譲り受けて結合建築したもので、大きすぎることから南側半分を解体して縮小することにしました。

母屋を引き倒した三〇日の午後からフレームとドアの移設作業。翌日風のない早朝から側面とスカート部分のビニールを張って、

いよいよ屋根のビーニルをかけようとした矢先に来客があり、茶飲み話をしている最中に風がでてきてしまった。いったん作業を再開しましたが、だんだんと風は強くなるばかりで危険と判断し中止。ほんの数十分の差でした。

ところが翌日はもっと風が強くなって暴風注意報が出てしまいました。その間、倉庫の修理や片付け、棚を造ったりの作業をしながら風の止むのを待つが一向に止む気配はありません。

翌日は帰らなければならないのでと気をもみましたが、結局丸二日間は手を付けられない状態が続きました。

最終日の五月三日は夜半の雨音が激しく心配しましたが、朝には雨もすっかりあがり無風に。さっそく早朝六時過ぎから作業を開始し一気に完成させました。やれやれ何とか間に合ったと安堵しました。

一仕事終わったところへＩさんがやってきたので小休止としたところ、まだ午前八時過ぎだったので、午前中にハウス内の荒越し、テーラーかけ、母が育てた苗を運搬して移植の準備などを手伝いました。

三、自然散策

五月二日は天気予報では風雨注意報がでて作業ができる状況ではなかったので、父が東の沢でも見に行くかと言い出したので出かけました。

造林地は私がまだ小学生の頃からだと思いますが家族皆で原始林を伐採してカラマツを植林したもので、四〇年以上経過して大木もありますが、やはり間伐しないといけない状況でした。

造林地の手前には珍しく雑木林が残され湧水もあり、沢にはアズマイチゲ、エンレイソウ、エゾエンゴサク等の山野草なども見られ素晴らしい環境でした。

東のＪ伯父が昔入植した跡地もみてきましたが、東の沢は全戸数九戸と人が減り、牧草地ばかりです。

その帰途、川向かいの沢にも行って来ました。いつもの場所から今晩の食卓にとアイヌネギを採取しました。昨年より沢が深く浸食され、エンレイソウやニリンソウの群落が増えていました。

また夕方には芭露のＡコープへ買い物がてら芭露の水芭蕉を見学、ちょうど満開でしたが、あまり観光客はいませんでした。

帰途、昨年の芭露川の決壊ヶ所を見かけました。本線は災害復旧工事に着手されていましたが、流入支川の決壊ヶ所はそのままで流された農地が池になり、木に引っかかったゴミの高さから水害の規模がかなりのものだったと想像できました。

見渡すとあちこちの山林もこの冬の大雪で倒され手つかずの状態でした。雪は非情な証人で人の住まない家は押しつぶし、すぐにそれと分かる家屋を数多く見かけました。

四、クラス会幹事会など

八月予定の上芭露中学校卒業四〇周年記念クラス会の準備会を五月一日遠軽で開催しました。いつもの場所なのでマスターとも顔なじみです。

北見からＩ君も駆けつけてくれて準備の詳細を打ち合わせの後の一杯が連日の農作業で汗をかいたことから実にうまい。

翌日記念植樹についてＫ君と上芭露公民館の現地にて打ち合わせを行いました。

今年は四月に「上芭露開基百年記念行事」も行われ、記念誌も出版されました。神社前に開基百年記念碑も建立されました。開基由来碑の「我々は過疎の不安に戸惑いながらも、此の百年の意義を考え」と言う表現が本音を語り印象的でした。